

小児用肺炎球菌ワクチン 接種を受けましょう



0歳～4歳の乳幼児のお子様をお持ちの保護者のみなさん、小児用肺炎球菌ワクチンを無料で受けることができるようになりました。



★ 肺炎球菌

多くの子ども達がノドや鼻の奥にもっている身近な菌ですが、体力や抵抗力が落ちたりしたときなどに、子どもの命にかかわる病気を引き起こす恐れがあります（細菌性髄膜炎、菌血症、肺炎、中耳炎、関節炎などの原因といわれています）。

細菌性髄膜炎

子どもの命にかかわるこわい病気です。脳や脊髄を覆う髄膜に細菌が侵入して炎症を起こします。発症すると約10～30%で後遺症が残り、約2～6%が亡くなるとされています。

原因菌の約90%をHib（インフルエンザ菌b型）（年間患者数 約270～450名）と肺炎球菌（年間患者数 約150名）が占めています。細菌性髄膜炎に特有の症状というものはありませんが、高熱、意識がもうろうとしている、吐く、機嫌が悪いなど、気になる症状がある時は、かかりつけの先生に診てもらった方がいいでしょう。



★ 小児用肺炎球菌ワクチンの接種方法

- 生後2ヶ月から9歳以下まで接種できます。（※無料となるのは5歳未満です。）
- 接種回数は、合計4回（初期免疫3回、追加免疫1回）が標準です。（※裏面に詳細）
- 1回あたり0.5mlを皮下に注射します。

子どもの肺炎球菌が原因となる感染症を予防できます。10年前に発売されて以来、世界中で、すでに100カ国以上の国でワクチンが取り入れられ、何千万人もの子ども達に接種されています。日本でも2010年2月からワクチン接種できるようになりました。

★ 予防接種の費用

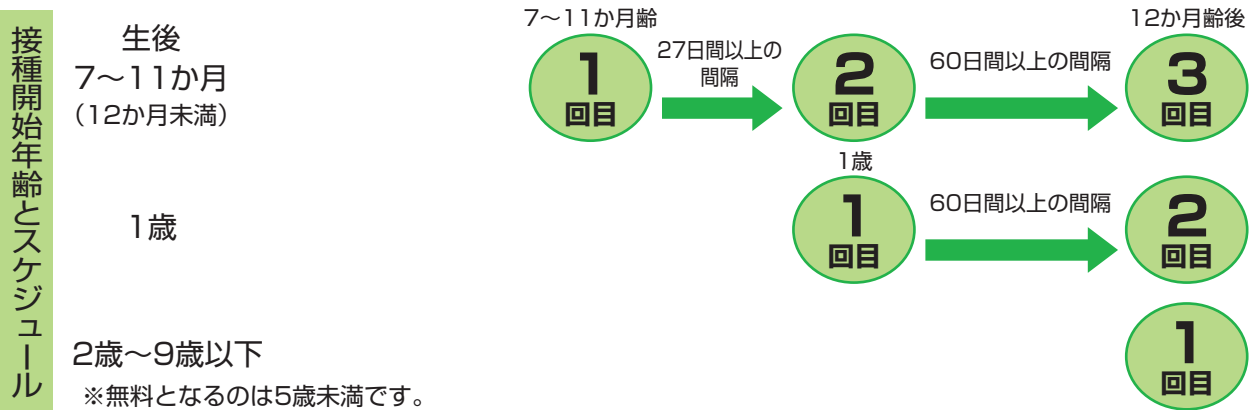
一般に、小児用肺炎球菌ワクチン接種を受けるには、4万円程度（標準接種を行った場合）の費用がかかります。市町村で助成事業を行っていますので、費用や接種を受ける方法については、お住まいの市町村にお問い合わせ下さい。

★ ワクチンのスケジュール

標準的な接種開始年齢の場合



標準的なスケジュールで接種をしなかった場合



小児用肺炎球菌ワクチン

Q ワクチンの接種で、肺炎球菌による髄膜炎、菌血症などをどれくらい予防できるの？

A 髄膜炎や菌血症*¹は、命にかかわる重い感染症です。2000年から定期接種*²になっているアメリカでは、ワクチンで予防できる肺炎球菌による重い感染症が98%減りました。

※1 菌血症：血液の中で細菌が増えている状態のことです。菌血症から細菌性髄膜炎や関節炎など、他の病気になることがあります。症状は発熱なので風邪と区別がつきにくく、気になる症状があるときはかかりつけの先生に診てもらった方がいいでしょう。

※2 定期接種：国が責任を持ってすすめるもので、接種費用は公費で負担されます（一部自己負担がある場合もあります）。また、予防接種を受けたことにより健康被害が起きた場合には、予防接種法に基づく救済制度があります。

Q ワクチンは希望すれば誰でも受けられるの？

A 小児用肺炎球菌ワクチンは生後2ヶ月から9歳以下まで接種できます。肺炎球菌による髄膜炎の患者さんの約半分が0歳代です。それ以降は年齢とともに少なくなります。そのため早い時期の接種が望ましいとされています。

Q ワクチンの副反応は？

A ワクチンを接種した後に、発熱や腫れなどが起こることがありますが、ほかのワクチンと同じ程度です。